「裁判員経験者と法曹三者との意見交換会」議事録

- 1 日 時 平成31年1月24日（木）午後2時から午後4時20分まで
- 2 場 所 長野地方裁判所松本支部会議室（3階）
- 3 参加者等

司会者 室 橋 雅 仁（長野地方裁判所刑事部部総括裁判官）

裁判官 野 澤 晃 一（長野地方裁判所松本支部裁判官）

検察官 加 藤 由 依（長野地方検察庁松本支部検察官）

弁護士 齋 藤 泰 史（長野県弁護士会所属）

1 番（裁判員等経験者） 50歳代・男性・会社員

2 番（裁判員等経験者） 40歳代・男性・会社員

3 番（裁判員等経験者） 40歳代・女性・パート

4 番（裁判員等経験者） 60歳代・男性・無職

5 番（裁判員等経験者） 30歳代・男性・会社員

6 番（裁判員等経験者） 40歳代・女性・会社員

長野司法記者クラブ5名

4 議事録

〔司会者〕

本日は、お忙しいところ、ありがとうございます。

本日の意見交換会の司会を務めさせていただきます長野地方裁判所刑事部部総括裁判官の室橋と申します。どうぞよろしく願いいたします。

裁判員制度が始まって、今年の5月で10周年を迎えますけれども、長野地裁本庁及び松本支部におきましても、多くの皆様に裁判員、あるいは補充裁判員として御参加いただいているところです。

本日の意見交換会は、裁判員を経験されました皆様の声をお伝えし、裁判員として裁判に参加することへの不安感や負担感を少しでも解消していただくとともに、皆様から率直な御感想や御意見をお伺いして、裁判員制度をよりよいものにしてい

きたいという思いから行っております。

今回参加された皆様が裁判員を経験されての感想、こういった点がよかった、あるいはこういった点は改善を要すると思われることなど、こういったことでも構いませんので、率直に御発言いただけたらというふうに思っております。

それでは、今回参加された裁判官、検察官、弁護士からも御挨拶をお願いします。

〔野澤裁判官〕

長野地方裁判所松本支部裁判官の野澤と申します。松本支部で行われる裁判員裁判で裁判長を務めております。

本日お越しいただいた裁判員経験のある方は、松本の事件の方が多くて、非常に久しぶりの方もいらっしゃるうれしく思っております。裁判員裁判でも御協力いただき、今日の意見交換会でも御協力いただけるということで、誠にありがとうございます。本日はよろしく願いいたします。

〔加藤検察官〕

長野地方検察庁松本支部の検察官の加藤と申します。本日はよろしく願いいたします。

私は今年度、松本支部で裁判員裁判を担当いたしました。本日は、皆様から率直な御意見をお伺いして、今後の公判活動に生かせればと思っております。よろしく願いいたします。

〔齋藤弁護士〕

弁護士の齋藤と申します。私は事務所は諏訪の方にありますけれども、中南信での裁判員裁判は松本の支部でやりますので、こちらの方で裁判員裁判を経験させていただいています。

ふだんなかなか裁判員の方とお話する機会がなくて、実際、私の周りにも裁判員の経験者はほとんどいないものですので、そういう意味でいろいろ今日は率直な意見交換させていただきまして、今後の弁護活動の方にも生かさせていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

〔司会者〕

どうもありがとうございます。

それでは、意見交換会に入らせていただきます。

それでは、まず、裁判員経験者の皆様に、裁判員裁判に参加した感想や印象を、率直にお聞かせいただけたらと思います。私の方で事件の内容などについて簡単に御説明申し上げますので、その後、1番の方から順に参加されての感想や印象をお話ください。

まず1番の方ですけれども、1番の方の事件は、収入が少ないなどと言われる妻に不満を抱いていた被告人が、妻に非難されたことなどからカッターナイフで頸部を切るなどして殺害したという殺人の事件です。

この事件は、公訴事実には争いが無いということで、量刑が争点になったというものです。

裁判員の職務従事期間は4日、又、判決を含む審理期間も4日ということになっております。

では1番の方、参加されての感想をよろしくお願いします。

〔1番〕

それでは、感想ということでございますので、ざっくばらんに話させてくださいと思います。

裁判員に決まりました、率直に考えたのは、そもそも知識を持っておりませんでしたし、いただいた冊子を読む程度だったということで、公正な目で本当に見られるのかとかですね、不安な点が多かったんですが、それよりも、このような機会が、もう二度とないんだらうなというふうに思うとですね、やってみたいという気持ちの方が勝りまして臨ませていただきました。

やるからにはしっかり務めようというふうに臨んだ次第です。

集まった方々もですね、年齢ですとか経験値も全然違う方ばかりで、考え方ももちろん違っておられますので、そういう方たちと色々な意見を出し合った中で結論

を一つ出すということで、途中から本当にチーム意識というんですかね、チームワーク的な感じが芽生えてですね、最後は非常に達成感と充実した気持ちでいっぱいだったなというのを、2年前なんですけども記憶しております。

もう少しやれば、もっとよい意見が出たのかなとも思いますけども、できる限りのことはしたなと思っています。

その中でですね、今まで他人事だったこの裁判だとか司法についての話がですね、自分事化されましたので、より身近に理解できたなというふうに今回のその裁判員を通じて思いましたので、今後はそういう、最近も私の近くでですね仕事の取引の方がですね、明日何か呼ばれていくということで感想を求められたんですが、是非やったほうがいいよということでお勧めを、選ばれるか分からないんですけど、そんなこともちょっと話したということで、非常にやってよかったなというふうに思っております。

〔司会者〕

どうもありがとうございます。司法を身近に感じられたということですかね。ありがとうございます。

では、2番の方に移ります。

2番の方の事件は、傷害致死の事件で、同居の母親に暴行を加えて死亡させたという事件です。

この事件についても、公訴事実には争いがないということで、量刑が争点になったというものです。

裁判員の職務従事期間は6日間、判決を含む審理期間は5日間ということになっております。

では、よろしくお願ひします。

〔2番〕

経験してみまして、被告人が有罪無罪を別に争っているわけではありませんでしたので、今おっしゃったとおりで量刑のみ、事実認定のみということで、あつけな

いと言っでは語弊がありますが、シンプルな、量刑につきましても、これが量刑検索システムなのかということで、同種というか、近似、類似例が非常にありましたので、ある程度年次が推測できまして、ただ、推測できたとしても、そのやはりそれぞれの価値観というか社会経験で6名プラス補充員の方2名、あとは裁判官の方3名ということで、だから11名ですか、いると、やはりそれでもばらつきがあるんだなと。それをその数日間の中で積み上げてというか、どこに落としどころをもっていくというか、そこがこの裁判員裁判のポイントというか、司法が、最高裁が求めているところなのかなというのを一市民として体験できたことは非常に有意義でありました。

あとは、ちょっと余談になりますが、裁判所ですとか裁判官の方が、もう本当に蝶よ花よというぐらいにおもてなしをしていただいて、歯がゆいぐらいに、という印象で終わりました。

〔司会者〕

ありがとうございます。

では3番の方ですが、3番の方の事件は、住居侵入強盗致傷の事件で、被告人が複数の共犯者と共謀して貴金属店併用住宅に侵入して強盗を行って、住人2名に暴行を加えて、そのうち1名に傷害を負わせたという事件です。

この事件も公訴事実には争いが無いということで、量刑が争点になったということです。

職務従事期間は5日、それから審理期間は4日ということになっています。

お願いします。

〔3番〕

裁判員裁判の紙をいただいた時は、第一印象は、正直面倒くさいなと思ったんですけど、でも、なかなかやる機会もないだろうということで、思い切ってお引き受けしたんですけど、思ったより堅苦しくなく、裁判長の方も分かりやすく説明していただいて、ニュースや新聞とかよりも詳しく起こってしまった事件の内容とか、

細かく経緯とか、やってしまったことへの心理、どうしてやっちゃったのかということ、すごく知りたいと思いました。

あと、ほかの方もね、ほかの裁判員の方の意見も聞けて、自分の考えだけじゃなくて、偏らなくてすごくよかったと思いました。

〔司会者〕

どうもありがとうございます。

では4番の方の事件ですが、4番の方の事件は、3番の方の事件に関連してですね窃盗幫助、住居侵入幫助、強盗致傷幫助という事件です。

これは3番の方の事件の関係で、事件について被告人が住宅を下見するなどして犯行を容易にしたということで、幫助として起訴されたというものです。

このうち強盗致傷幫助については、被告人に争いがありまして、被告人の行為が正犯者らの犯行を容易にしたのかどうか、また、被告人に強盗幫助の故意が認められるかどうかということが争点になりました。

結論としては、強盗致傷の幫助は窃盗の幫助になったということです。

職務従事期間は8日間、審理は5日間ということです。

では、お願いします。

〔4番〕

まずですね、裁判員候補ということで連絡いただいた時に、昨年度、その1年前までであったならばできなかったなど。たまたまその前年で退職しましたので、体がフリーになりましたので、これは貴重な体験ができるなということで喜んで参加させていただきました。

内容的にもですね、みんなそれぞれ意見を出し合って、お互いそれぞれの考え方というものも頭に入れた上で総合的に判断をしたということで、野澤裁判長のリードでスムーズについていきますかね、結論まで出すことができたということで、非常に貴重な経験をいたしました。

テレビのドラマでも裁判の光景が出ますけれども、同じだなということと、ちよっ

と違うなというようなどころがありました。具体的に言えば、被告人がですね非常に冷静で、自分で反論もしていいところでもずっと静かに聞いていらっしやったということが印象に残っています。

全体的に、このような形で貴重な経験をしたことを、できれば大勢の人に、周りの人に伝えたいというところなんですけれども、どこまで言っているのかというところがですね、評議の時に話をしたのか、実際裁判の中で話をしたのかというところが、ちょっと記憶が曖昧なところがありまして、ですので、数人にしか話していないというところで、もっとうまく広めるにはどうしたらいいのかなと、今回のこれも広報のところを出すことができるということを聞きましたので、そういう意味では、今日のこの参加も非常にこれからのためになるなということを思って今日出席いたしました。

〔司会者〕

どうもありがとうございます。

では、5番の方の事件ですが、5番の方の事件は傷害致死の事件で、これは暴力団関係者同士の争いから、被告人が共犯者と共謀して被害者に暴行を加えて死亡させたという事件です。

これは、審理が始まった時は公訴事実には争いがないということで量刑が争点だったようですけれども、最終的には共謀の内容や時期に争いが生じたと、こういうふうに聞いておりますけれども、職務従事期間は5日間、審理は4日間ということになります。

では、お願いします。

〔5番〕

率直な感想としては、まず、裁判員裁判の通知が来た時点で、これは自分に来たものではないということは思いました。実際、世の中で普及しているインターネット等で調べたら、ああ、こういうものも本当にこう、私みたいな人間が選ばれるのかと思ひまして、家族、会社に話したところ、是非参加してみればいいんじゃない

のということで、温かいお言葉もいただいたので参加をさせていただいたんですけど、実際参加したのは自分自身なんですけど、本当に何ていうんですかね、初めての経験だったので、とても緊張と、どういうことをやるんだろうという、やっぱり自分との格闘がとてもあったような状況でして、何ていうんですかね、そこに自分が立っているいろんなことを考えて、いろんな発言をして、いろんな方たちの意見があって、こういう形で最終的には判決っていうところに至ったんですけど、とてもやっぱり難しいなっていうところが率直な意見となります。

やっぱり初めての経験となりますので、とても大変だったんですが、とても勉強になりましたし、本当に自分は公平に考えられるのかというところも不安の一つだったんですけど、やっぱり自分だけの意見ではなく、いろんな人の意見を取り入れたことによって正解に導くんだなということで、私もこの裁判を通じて会社もそういう感じなのかなというところもあったので、一つ成長したなというところが大きなところとなりますので、自分としては以上な感想となります。

〔司会者〕

どうもありがとうございます。

では、6番の方ですが、6番の方の事件は、3番の方の事件と同じ事件になります。

職務従事期間は4日間、審理は判決含めて3日間ということになります。

では、お願いします。

〔6番〕

まず裁判所ってあまり来るところではないので、まさか自分が選ばれることないだろうなと思ってたんですけども、実際に選ばれて、最初はできるかなととても不安でした。あと、どんな凶悪な犯罪なのかなというのも、とても不安なところでした。裁判の知識もないので、とっても不安だったんですけども、でも選ばれたからには、じゃあちょっと頭を切り替えて、私なりにお役に立てるのであれば務めさせていただこうと思ってお引き受けいたしました。

今まで、興味とかあまりなかったんですけども、新聞を見たりニュースを見て、またいろいろ視野が広がって興味が出たので、とてもいい経験になりました。

裁判員の候補ってというか選出された時点から、大勢の方が関わっているんだなと思って、一つの事件にとっても大勢の方が関わっているなと思って、それはとてもびっくりしました。

あと、職場、仕事してるんですけども、職場のお休みを長くいただくっていうことを理解していただいて、経験させていただいたことにとっても感謝しています。

〔司会者〕

どうもありがとうございました。司法を身近に感じたとかですね、あるいは社会により関心を持つようになったとかということが挙げられていたと思います。裁判員になったことをきっかけに、新聞の社会面をこれまで以上に読むようになったとか、そういったことを言われた方も中には昔いらっしゃいましたけれども、そういったことのきっかけにこの裁判員裁判に参加したことがなった方もいらっしゃると聞いてうれしく思いました。

それでは、意見交換としては、まず審理の関係で皆様に御感想や御意見を伺おうと思います。

まず、審理の関係では、検察官、それから弁護人の主張活動ですね、主張が皆様にはどう受け止められたのか、どう響いたのかということについて皆様の感想や御意見を伺いたいと思います。

検察官と弁護人の公判での審理での活動というのは、法廷で皆様が心証が取れる分かりやすい、そういう審理を目指して検察官、弁護人の主張、立証活動が行われるわけです。そして、皆様に判断をしていただくに当たって、判断のポイントは何かということを知りやすく伝えるということが検察官、弁護人の活動の主眼ですけれども、そういったところを踏まえて検察官と弁護人の冒頭陳述、これは証拠調べに先立って審理の最初に行われる冒頭陳述ですね。それから、審理の最後に行われる検察官の論告、それから弁護人の弁論、これについて皆様はどういっ

た点に注意して、着目して聞いていたのか、また、検察官と弁護人の主張は分かりやすかったかどうか、情報量としてはどうだったか、適切だったか、あるいは情報量として多かったのかどうか、もし分かりにくかったというところがあれば、どういったところが分かりにくかったのかということについて御感想や御意見をお聞きしたいと思います。

では、同じく1番の方からお願いします。

〔1番〕

私はですね、やはり事件の性質上、家族内というか家庭内で起こったことなので、よくよくその事情を聞かないとですね、どちらも悪かったとか、落ち度があったのかとか、どの辺がポイントなのかということで、私たちの普通の物差しというかね、私たちの通常の見方で見ると、ちょっとここはおかしいんじゃないとか、何であんなに考えるんだろうねっていうことは休み時間にいろんな人と話したりしてですね、一般的に考えるとちょっとおかしいよねとかですね、そういうところがあったので、そののところ、疑問なところをですね、よく自分としてはそこを重点的にメモをしたり聞いてたりしました。

説明につきましては非常に分かりやすく、やはり専門的な用語をあまり出されるとやはり分からないので、私たちの分かりやすい形で説明をいただきましたので、その辺については十分理解はすることができました。

〔司会者〕

ありがとうございます。あまり専門用語を使わずに、分かりやすく説明をされたということですかね。

〔1番〕

そうですね。図だったり、いろんな表だったり、いろいろ使っていただいたりですね、したので、分かりやすかったなというふうに記憶しております。

〔司会者〕

ありがとうございます。

2番の方，いかがですか。

〔2番〕

検察，弁護，双方ですね，非常に平易，分かりやすい表現で，資料も分かりやすく，短く端的にまとまっているなど，かなり裁判員に配慮されているなどという印象は持ちました。

私が担当した事案が被告人が軽度の知的障害を有する事案だったんですが，被告人のパーソナリティに検察，弁護人，双方が障害の程度，差はあれ，公判前整理等で障害があるというのは認めているのかなと思いましたので，パーソナリティ，障害のことを最初にですね冒頭でもう少し触れていただいた上で公判が進んだほうが審理手続としては分かりやすかったのかなと。通常の方だったら，こう判断するところを，やはり障害をお持ちだから常識的な判断ができないとか，後々になって信大の方が出てきてそういった御説明がありましたが，そういった障害についてのパーソナルは，できれば早い段階の方がよかったのかなという印象は持ちました。

〔司会者〕

分かりました。今のは，証拠調べに入る前の冒頭陳述の段階で，もう少しその障害のことについても言及してくれると，証拠調べに入りやすかったと，こういうことですかね。

〔2番〕

おっしゃるとおりですね。はい。

〔司会者〕

分かりました。ありがとうございます。

3番の方，いかがですか。

〔3番〕

資料とかいろいろいただいて，モニターとかも見せていただいて，証拠品とかも見せていただいて，すごく分かりやすくて丁寧で有り難かったです。

〔司会者〕

3番の方の事件は、関係者が共犯者も含めて多数いるということで、それぞれの関係を最初理解するのが難しかったかなと思うんですけど、そのあたりは冒頭陳述とかでは理解できましたか。

〔3番〕

そうですね、書類、資料いただいて、みんなで見て、話し合ったりして、評議とかして、それで、ああそうなんだねっていうことで、はい。

〔司会者〕

冒頭陳述では、人物関係図というものを冒頭陳述要旨に付けられたと思いますけれども、それは分かりやすかったですか。

〔3番〕

はい。

〔司会者〕

ありがとうございます。

4番の方、いかがですか。

〔4番〕

私の時にも人物関係図が示されましたので、但し、それを見ても実際には事件の全体を通して、これを脇に置かなければ理解できないようなところがありましたので、この人物関係図は非常に有り難かったです。

集中して聞いておりましたので、話はずっと頭に入りました。

〔司会者〕

4番の方の事件では、検察官の冒頭陳述要旨がA4版で2枚あって、論告要旨は3枚ということで、かなり枚数としては多かったかなと思うんですけども、頭にその場で入りましたでしょうか。

〔4番〕

そうですね、その場及び控え室へ帰ってきて、またそれを一生懸命読むというような形で頭に入れました。ですので、折に触れ、配布していただいた資料を読み直

しているというふうな感じでした。

〔司会者〕

分かりました。ありがとうございます。

では、5番の方、いかがですか。

〔5番〕

検察、弁護人の冒頭の何ていうんですかね、資料とかはとても分かりやすかったということで、初めての体験なので、実際こうパッと渡されて聞いているだけだと、やっぱり頭の中には入っていかなかったんですけど、やっぱり控え室の方に戻って改めて見返してみると、あっすごい工夫されているんだな、あっこんなに分かりやすくしてくれてるんだなっていうのがとても印象的でした。

実際、文は結構私も苦手なほうだったので、もう少し図とかで、分かりやすくする点の方も多かったんじゃないのかなというところも正直言っております。

〔司会者〕

ありがとうございます。

6番の方、いかがですか。

〔6番〕

皆さんと同じになってしまうかもしれないんですけど、とても資料とかも分かりやすくてよかったです。人物の表の関係図とかも、色分けをされていて、とても見やすくて、順を追って事件がどうだった、じゃあどうだったという説明をしていただいて、とっても分かりやすい資料でした。それで、評議もそれを見ながらできたので、一人ずつの意見を聞きながら自分の意見もしっかり聞いていただけたので、とってもよかったと思います。

〔司会者〕

分かりました。ありがとうございます。

ここからは適宜ということで御発言いただけたらと思うんですけども、一般的に検察官はパワーポイントで、いろんな色を使って、きれいなものを冒頭陳述でも

論告要旨でも出されることが多いと思います。弁護人の方は、パワーポイントを使うものは少ないかなというふうに思うんですけども、そのあたりで何か分かりやすさというところで違いはありましたか。今の御発言を聞いていると、多分それは検察官の書面が非常にきれいなものを作られている方が多いんですけども、弁護人の方もパワーポイントを使ったりとか、色を使ったりとか、あるいは図を使ったりとか表を使ったりとかして工夫されていると思うんですけど、特にそのあたりで形式で分かりやすさが違うということはないですか。

(参加者うなずく。)

それからですね、論告の関係では、検察官は多くの事件で量刑データ、量刑検索システムに言及して求刑をしていたものが多かったと思いますけれども、その求刑はどうして何年と、どうしてこの年数を求刑するのかということがデータとの関係で分かりやすかったのかどうかというところではいかがでしょうか。2番の方、いかがですか。

[2番]

初めてだったので分かりやすいということはないですが、分かりにくいということはなく、量刑検索システムがありまして、被告人の犯行態様とかね、被害者の人数等々である程度相場があるので、こんなものなのかという印象を持って受けました。

[司会者]

検察官は、何年と求刑しますよね。弁護人も中には科刑意見を弁護人としては何年が相当だという意見を述べているものもありましたけれども、どうしてその年数が相当だと検察官や弁護人は述べているのかということが、その場で分かったかどうかというそういう観点ではいかがでしょうか。5番の方、いかがですか。

[5番]

正直その検索データを見させていただいて、本当に率直な意見なんですけど、分からなかったですね。何でこういうふうに言ってるんだろうっていう、何ていうん

ですかね、いろんな初めての経験だったので、自分はこう思う、でもやっぱりいろんな人たちもこう思う、データもこういう形だと思う、それに対して自分の言えるような場を作っていただいて、あんなるほどっていうことでその検索データはとても非常に役に立ったなということは痛感しましたね。

〔司会者〕

ほかの方はいかがですか。検察官や弁護人が、どうしてこの年数を相当と言ってるんだろうかということが、例えば論告とか弁論を聞いて理解できたかっていうところではどうでしょうか。1番の方、いかがですか。

〔1番〕

私が最後にそういう話になったときに、どうやって決めるんだろうなっていうのは不思議に思ってたんですが、ああいうデータを使ってやってるんだなっていうのは初めて分かったのと、その刑の重さだったりも、いろんな情状によってですね前後するんだなというのがあって、求刑とですね、その弁護士さんの方から言ってくる刑が5年ぐらい違うんですけど、その差はどうやって、その5年というのを選んでる、選んでるといふか、その5年の差は、簡単に5年ですけど相当の5年だと思うんですよね。その5年の差はどういうところで言ってくるのかなというのが、自分としてはちょっと分からなかったもので、どちらが正しいのかっていうのはですね、やはり最後まで迷ってはいました。

〔司会者〕

いずれにしても何年が相当というだけではなくて、その根拠として、どうして何年なのかという説明もしていただくと、より分かりやすくなるということではあるんじゃないかな。

〔1番〕

実際法律に携わっているわけではないので、その求刑が何年っていう前に、弁護人を含めた上で、こういうことをしたらこういうふうになるよっていうことをもっと具体的に、私たちの方も、休憩室に戻っていろいろ資料を調べるんですけど、私

は検察側の方の作った資料の方が読みやすかったような状況で、分かりやすくてすつと頭に入ってきたんですけど、弁護人の方は正直余り頭に入っていないような状況だったんですね。そういう具体的なことに対して求刑がこれこれこういう、だからこういうふうになりますということで、ああこういうふうに決めてるんだなということになってくるので、資料としても、そこは紐づくんだなっていう感じの印象がありました。

〔司会者〕

分かりました。

では、2番の方、どうぞ。

〔2番〕

法廷の場で検察、弁護人、双方から懲役何年が相当だってありましても、あくまで自己主張なので、何年だろうがよいといっは大変なんなんですけど、検察がこうで、弁護人がこうっていうのは分かっているわけですので、結局それを持ち帰って決めるという感覚でおりましたので、その場の数字は正直全然印象に残ってないといえますか、はい、そういう感覚ですね。

〔司会者〕

それで、先ほどの皆様のお話の中で、この冒頭陳述とか論告弁論で検察官や弁護人が皆様に配布したメモですね、これを控え室、評議室のことだと思いますけれども、そこで見た、あるいは評議の際に参照したというようなお話があったと思いますけれども、皆さんはこの検察官や弁護人が配布したメモというのを、どのように使われたのか、また、評議の際に、改めて参照していたのかどうか、このあたりはいかがでしょうか。4番の方、いかがですか。

〔4番〕

結構資料として枚数がありましたので、その内容の理解について裁判長が我々みんなの意見を聞きながら一つ一つ進めていきましたので、非常に重要でしたし、それによって一つ一つ我々が理解できる、できない、1か所だけちょっと私、検察の

方の文書で理解に、すっと入ってこない部分ありましたけれども、それ以外はそういう意味ではしっかりとみんなで話をして、それぞれ意見も出し合って理解できたんじゃないかなというふうに思います。

求刑のところの実際に、その中でも、強盗致傷なのか幫助なのかというところのですね、その辺のところについては非常にみんな悩んで、結論まで至りましたけれども、結構時間をかけました。

〔司会者〕

ありがとうございます。

ほかの方、いかがでしょうか。やっぱり評議の際とかいろんな場面で、検察官、弁護人が配ったメモは、活用されたんでしょうか。2番の方、いかがですか。

〔2番〕

非常にカラー等で分かりやすかったので活用しましたが、飽くまでメモですので、メモといわゆる事実認定、事実じゃないと、それを混同しないようには常に注意しながらですね、はい。ずっと読み込んでしまうと、何かそれがあたかも事実のように捉えがちなんですよね。そこは気をつけました。

あとはやっぱり検察サイドの方が情報量があるのでね、どうしても弁護側とは、そこで多少違いはあるのかなという感はありました。

〔司会者〕

違いというのは、どんな感じの違いでしたか。

〔2番〕

やはり検察側の方が物的証拠ですとか、犯行後の尋問ですとか、証言等も出てますし、やっぱり出ている資料の内容が、より検察の方が具体性があるのでね、ともすると、何かどうしてもそれを事実と捉えがちになるので、それは気を付けました。

〔司会者〕

なるほど、分かりました。参照はしたけれども、飽くまでも主張なので証拠ではないということは、しっかり区別して臨んだと、こういうことですかね。

〔2番〕

はい，そのとおりです。

〔司会者〕

ありがとうございます。

ほかの方，いかがですか。同じですかね。皆さん，評議の際，これを手元に置きながら評議に臨まれたということでしょうかね。

（参加者うなずく。）

全員そうですね，うなずかれていますので，活用されたということですかね。はい。

ここまでのところで，主張の関係ですね，裁判員の経験者の方から感想，御意見伺いましたけど，検察官，弁護士の方から，それを聞いての感想などいかがですか。検察官いかがですか。

〔加藤検察官〕

いろいろな御意見ありがとうございました。

お聞きした中で，分かりやすかったという御意見をいただいたのは非常にうれしいことだと思っております。ただ，図や表によってですね，視覚的に分かりやすいものがあると，よりよかったという貴重な御意見もいただきましたので，今後はその点もですね意識して，よりよいものを作っていきたいと思っております。ありがとうございました。

〔司会者〕

ありがとうございます。

齋藤弁護士，いかがですか。

〔齋藤弁護士〕

ありがとうございます。

弁護士の立場でいきますと，弁護士はそれぞれが，特に組織に属しているわけじゃないものですので，担当する弁護士によって，恐らくやり方が，かなり開きがある

んだらうと思うんですね。私は比較的カラーのメモ、検察官に近いような形でやるスタイルでやることが多いのですが、ただ、そういった見やすさだけで結論が変わっちゃうと困るなというところは非常に日々考えているところですので、そういった主張と、それから証拠を、しっかり分けて考えておられる裁判員の方の御意見をお伺いして非常に安心をしました。

今後、今日いただいた意見も弁護士会全体にフィードバックして参考にさせていただきます。ありがとうございました。

〔司会者〕

どうもありがとうございます。

それでは次に、証拠調べに移ります。

法廷では証拠調べの際に多くの証拠が証拠書類、つまり書証ですね、書類として法廷に出てきて、検察官、弁護人がその内容を説明することになりますけれども、そういったその証拠の説明を法廷で聞いて、その場で内容が理解できたでしょうか。あるいは、分かりにくいと感じたことはありましたでしょうか。今度は証拠の説明の方ですね。多分、図面とか写真についてはモニターで映して皆様の前に示されたと思いますけれども、それらも含めて、この書証の説明が分かりやすかったかどうかというところでは皆様いかがでしょうか。1番の方、いかがですか。

〔1番〕

私も普通に話を聞くよりもモニターを見たということで、より理解が深まったっていうのはあります。普通に聞くよりは、はるかに具体的に分かったなというふうに思っておりますので、ああいうものは引き続きよりよくやっていただければと思っております。

〔司会者〕

声の大きさとかスピードとかは、いかがでしたか。

〔1番〕

それは個人差があると思いますので、私の時の御担当の方は、比較的ゆっくりしゃ

べっていただいたので分かりやすかったと思っています。

〔司会者〕

ありがとうございます。

2番の方、いかがですか。

〔2番〕

非常に分かりやすかったと思います。スピード感，声なども，特段問題はなかったです。

〔司会者〕

では3番の方の事件では，共犯者とかですね，あるいは被害者の方々の複数の証拠がね，供述調書の朗読もされましたけれども，そういったものも含めて分かりやすかったですか。

〔3番〕

はい，分かりやすく説明していただいて，モニターもしっかり見させていただきました。

〔司会者〕

何かその内容の説明が，複数の人たちの話が出てくるので，内容が重複しているとか，分かりにくいってことはなかったですか。

〔3番〕

重複はしてましたけども。

〔司会者〕

ああそうですか。もう少し重複しているところとかがなければ，より分かりやすかったということですかね。

〔3番〕

そうですね，はい。

〔司会者〕

そうですか。分かりました。ありがとうございます。

4 番の方，いかがですか。

〔4 番〕

書証については問題なかったと思います。

〔司会者〕

4 番の方の事件も，結構供述調書の朗読がされたと思いますけれども，いかがでしたか。分かりやすかったですか。

〔4 番〕

記憶に留めるという意味では，しっかりみんな真剣になって聞いていました。

〔司会者〕

ちなみにメモとかは取られましたか。

〔4 番〕

ええ，メモ取りますね。メモ取りながら聞いて，で，それをまた後でチェックするというような形でやっておりました。

〔司会者〕

ありがとうございます。

5 番の方，いかがですか。

〔5 番〕

非常にモニターとかも使って，普通に手元の資料にもありましたので，見やすかったなという印象になりますね。ただ，評議室とかに戻った際に，そのモニターを思い返す時に，ちょっとパッと出てこなかったような印象だったので，もう少しその証拠とかのものに関しては，例えばそのときに裁判員の方とか，資料として映し出されたものは確か手元にはなかったような状況だったと思うので，もう少しその辺があればいいなというような感想がありました。

〔司会者〕

分かりました。一つ一つの証拠が何を立証するための証拠なのかっていうことは，理解しながら聞かれてましたか。

〔5番〕

そうですね、はい。

〔司会者〕

それを分からせるような検察官，弁護人の工夫とかもありましたか。

〔5番〕

そうですね、ありましたね。やっぱりその時も、大きくこれがついていうもので、見て分かるような状況で、いろんな角度からも撮っていたような状況だったので、確かにその枚数が多すぎてしまうと、いや疲れたとか、もういいよっていう話になるんですけども、ちょうど私の個人的には適切な状況だったなという形で、また少なすぎても何でこんなに少ないのかというふうに思いますし、その辺がやっぱり大きな事件になればなるほどやっぱり多いとは思うんですけど、私のやったものに関してはちょうど適切だったという印象になります。

〔司会者〕

ありがとうございます。

6番の方、いかがですか。

〔6番〕

また一緒になってしまうんですけども、モニター見ながら順を追って説明していただいて、とても分かりやすかったです。最初は、とても時間がかかって大変なのかなと思ったんですけども、少しずつ丁寧に説明していただいたので分かりやすくて、とてもよかったです。

〔司会者〕

6番の方の事件でも、共犯者の方とか被害者の方の供述調書の朗読がされたと思うんですけども、むしろ直接、話しているその人に法廷で直接話してもらったほうが分かりやすいんじゃないかと思ったことありましたか。

〔6番〕

それよりは、この文書になって、目で見ながら、きちっとしたもので、その場で

聞いて話で流れてしまうより、見ながらの方がよかったので、直接じゃなくてもよかったかなど。

〔司会者〕

なるほど。3番の方、いかがですか。同じく供述調書がたくさん朗読されたと思いますけれども、むしろその本人に直接話を法廷で聞きたいという思いはありましたか。

〔3番〕

そうですね、直接話を聞きたかったっていうのもあるんですけど、それだけだと頭に入りきらないので、やっぱり資料というのは大変有り難く使わせていただきました。

〔司会者〕

分かりました。

総じて皆様の御意見を伺うと、証拠調べの内容は、分かりやすかったということですかね。ただ、メモを取りながら聞いていて、それを後でまた振り返って参照もして理解を深めたと、こういうことでしょうかね。

(参加者うなづく。)

一方で、証人尋問や被告人質問は分かりやすかったかということでお聞きいたします。

被告人質問は、全ての事件でされたと思いますし、証人尋問は行った事件と、そうでない事件とあると思いますけれども、こういった証人尋問や被告人質問について、検察官や弁護人の証人に対する尋問や質問の、またそれに対する答えは分かりやすかったか、皆様、その場で理解できたか、検察官や弁護人はどうしてそんな質問をしているのかという意図は、その場で理解できたのかどうか、また、声の大きさとかスピードとかどうだったかというところで感想や御意見を伺えますでしょうか。6番の方からいかがですか。

〔6番〕

被告人に聞いて、質問に答えてもらって、それで理解できたんですけども、もう少しこれはどうしてかなってちょっと聞きたいところもあったのはありました。

〔司会者〕

少し疑問に思ったところがあって、そこをもう少し突っ込んでくれると。

〔6番〕

そうですね、でも、そんなに長く聞けないんでどうしてかなっていうところはありました。

〔司会者〕

結局それは、そのままになってしまったということですかね。

〔6番〕

そうですね。評議の時にみんなで話し合って、その時に理解できたところもあるんですけども、その場でもう少し質問したかったところもあったんですけど。

〔司会者〕

評議の時に、この点もう少し聞いておけばよかったなということですかね。

〔6番〕

後から出てきて。

〔司会者〕

なるほど。ただ、質問と答えは分かりやすく入ってはきたのですかね。

〔6番〕

それは入ってきました。

〔司会者〕

分かりました。

5番の方、いかがですか。

〔5番〕

特に被告人に対して話を、私たちから質問するわけでもないんですけど、実際その検察側と弁護側の方で言ったことに対して、しっかりメモを取りながら評議まで

いけたのかなというところで、全て弁護士と検察側の方も言っていたので、すごい鋭いところまで聞くんだなっていう印象的だったので、自分からはちょうどよかったなという印象がありました。

〔司会者〕

5番の方の事件では、共犯者と被告人の話が食い違うところがあったと思いますけれども、どこが食い違っているかというのは、証人尋問、被告人質問を聞いて、理解できたんでしょうか。

〔5番〕

そうですね、違っているなっていうことは、その時に客観的に聞いてるんですけど、評議室に入ってから、さらに自分で整理して、メモとかやって、あっそういうことかっていうことで、ただその時に話し合っている時って、やっぱり耳を傾けているので、頭の中ではじゃあ本当に理解しているのかって、本当にここが違うのかっていうことが、ちょっとスピードは正直言って私はついていけなかったような状況になりますね。ただ評議室に入ってきて、ああこういうことなのかっていうことで、周りの裁判員の方たちもそういうことでっていうことで理解は入ってきたような状況なので、正直なところ、少しくう止めて聞きたいなというところはありましたね。

〔司会者〕

それは、証人尋問とか被告人質問に入る前に、実はその2人の話が食い違っているんだっていうことは前提として分かって臨まれてたんですか。

〔5番〕

そうですね、はい。

〔司会者〕

そうですか。なるほど。

〔5番〕

その時に分かってたんですけど、やっぱり食い違ってるけど、じゃあどっちが本当のこと言ってるのかっていうことも聞かなきゃいけないし、例えば検察側の方が

こうだこうだっていう話をしてて、こう聞いてても、自分で決めなければいけないので、とても責任感があるところだったような気がしますね、印象的には。だから難しいなって思いました。

〔司会者〕

分かりました。

4番の方、いかがですか。

〔4番〕

私のところも証人と被告人との話が一致しないというところがありまして、みんな真剣に聞いて、それぞれの考え方が評決する時にそれぞれの意見として反映されたというふうに思います。ですから、そのところを何が真実なのかなというところを洞察しなければいけないわけですね。それが正しいのかどうか分からないけれども、みんなの意見として、一つの方向にはいったとは思いますが、その後その証人も裁判になったと思いますけれども、そこでどのようなことになったのかっていうことがちょっとひっかかっておりまして。

あともう一つですね、物証として被告人の携帯が行方不明になってしまったんですね。そこに私自身としては、なくなって、その後見つかりましたかということを経験官に聞いてもらったんですけども、裁判員が直接聞いてもいいんですよというふうに言われたんですけども、なかなかね、あの場で自分自身が質問できるかという、ちょっと自信がなかったものですから、その辺のところの証拠、それが出てくればですね、その被告人がどのくらい関わっていたかと、どのような報告をしたのかというところが、過程、事実関係が分かるわけですけども、その肝心の携帯がないというところで、そのあたりのところも推察していくというようなところで、その辺のところはなかなか大変ではありましたが、勉強にはなりました。

〔司会者〕

共犯者等の証人尋問と、被告人質問する前にですね、この証人尋問や被告人質問では、ここがポイントになるというような説明というのは、検察官、弁護士とか裁

判官からあったんですか。この証人尋問や被告人質問では、特にこの点がポイントになるんですよというような説明とかはありましたか。

〔4番〕

記憶にありますね。誰がっていうところまでは、ちょっと正確には覚えていませんけれども、うん、この証人に関してはというところで事前に一言聞きました。

〔司会者〕

そういったものも頭に置いて尋問に臨んだと、こういうことですかね。

〔4番〕

はい。

〔司会者〕

ありがとうございます。

3番の方、いかがですか。

〔3番〕

質問の方も分かりやすく、私たちが聞いても頭に入ってくるように質問をさせていただいて、答える被告人の方も、もう罪を認めているというか、反省しているような感じだったので、分かりやすく聞いててよかったと思います。

〔司会者〕

分かりました。ありがとうございます。

2番の方、いかがですか。

〔2番〕

犯行自体、犯行当日の質問、尋問等はね、当然趣旨がはっきり分かるのはいいんですが、そうではない例えば過去というか日常生活とか、証人についても日常的に関わっている方に出てください、どうでしたかと聞いたとしても、これは別に犯行には全く関係のないことであって、ただ、それをいろいろ尋問することによって、どうしても被告人像が、どっちかに偏りがちになってしまうというか、私に関わった事案ですと、傷害だったんですけど、その傷害の常習性、日常性を訴えたい検察

側と、一過性をアピールしたい弁護側とだと思っんですが、結局その日常のそういった話を聞けば聞くほど、何となく勝手にその犯行とは関係のない過去をイメージしてしまって、若干色眼鏡で見ちゃわないかなと、そこはですから完全に検察と弁護側の能力というか、その辺、プレゼン能力でも変わってきてしまうのかなと。ですから、その辺でもう少し、例えば裁判所側の方で、これは飽くまで犯行当日のことではありませんとかですね、何かそういう枕詞を付けたほうが、初めての裁判員にとっては分かりやすいのかもしれないなという印象を持ちました。

〔司会者〕

分かりました。要は、一つ一つのその個々の質問が、一体何のために聞いているのか、誰に向けて聞いているのかと、公訴事実の立証なのか、犯罪事実の立証なのか、それとも情状なのか、情状であれば一体どの部分の情状に関わることなのかということが分かるような何か枕詞なり、例えばこの点について聞きますとか、そういうものがあると、より分かりやすかったということでしょうか。

〔2番〕

はい、おっしゃるとおりですね。

〔司会者〕

1番の方、いかがですか。

〔1番〕

私の方のこの事件は、弁護側も検察側も、争点のところをしっかりと話をさせていただきました。被害者は奥さんだったんですが、その奥さんの落ち度があったということを弁護側は話をして、そこは争点として話をしてきましたし、検察側の方はですね、被告人の計画性だったり残虐性だったりというところをポイントに挙げてきて、それに対する証言だったりそういうものも聞かせていただいたということで、私も裁判長から質問していいよってということだったので、直接被告人にですね、自分としてはこう思うんだけど、どう思ったんですかっていうことは率直に聞かせていただいて、自分の質問、ちょっとおかしいだろうとか思ったことは聞かせてい

ただいたということで、その辺で私は納得しながら次のステップに進めたなということを感じております。

〔司会者〕

被告人質問によって、被告人がなぜその犯行に及んだという動機のところは、被告人質問によってよく分かりましたかね。

〔1番〕

そうですね、よく分かったんですけど、一般的な考え、私たちが裁判員の方との話合いでは、一般的な考え方ではちょっと犯罪を犯す人はこういう人なのかなとかそういう感じで、私たちの考えとはちょっと違うんだなっていうのが意見でした。

〔司会者〕

ありがとうございました。

ここまでのところで審理関係ですね、皆様にお聞きしましたけれども、検察官、それから弁護士から、もしこの点聞きたいということがあれば質問していただけたらと思いますけれども、検察官はございますか。

〔加藤検察官〕

2点お聞きしたいところがあります。

証拠調べの中で、こういうところをもっと見たかったですとか、最終的な判断を下す上で、こういうことをもっと説明してくれればよかったという感想を抱かれた方がいらっしゃいましたら御意見伺いたいと思いました。

2点目は、証人尋問ですね。直接、検察官や弁護士が証人に質問するときのことなんですけれども、そのスピード、テンポというものはいかがだったでしょうか。

〔司会者〕

こういう点について証拠調べの際、もう少し説明してほしかったとか、あるいは証人尋問、被告人質問における質問のスピードとかですね声の大きさとか、このあたり何か気になったことはあったかというところではいかがですか。2番の方、いかがですか。

〔2番〕

スピード、声等は全く問題ありませんでした。

あとは、証人ですとか証拠関係ですが、例えば証人、警察、検察でいろいろという方から話を聞いてという中で、なぜこの人が今回証人になったのかですとか、例えば私が関わった事案ですと、もっと日常生活の中で接しているお店の店員さんがいたりしたんですが、その方は何で証人として出ないんだろうとかですね、それは別に検察だけじゃなくて弁護側でもあるんですけど、なので、なぜこの証人に来てもらったのかっていう、その辺が分かると、この証人は、要はこの人は来てくれなかったとかですね、その辺が分かるといいかなと思いました。

〔司会者〕

ありがとうございます。

声の大きさとかスピードで、ちょっとよくなかったといいますかね、もう少し声大きかったらよかったとか、もう少しゆっくり話してくれればよかったということを感じた方はおられますか。そこはよろしいですかね。はい。

〔加藤検察官〕

はい。ありがとうございます。

〔司会者〕

では、齋藤弁護士から、ございますか。

〔齋藤弁護士〕

証人ですとか被告人に質問したい事項がある場合に、先ほど4番の方だと、ちょっと自分ではなかなか質問しにくいというお話がありまして、他方で1番の方は直接お話してよかったっていうお話があったんですけど、ほかの方で聞きたいことがあったときに自分でその質問を実際されたのか、されたとすればその感想を、逆にされなかったとしたら、どうしてできなかったのかなというところをお伺いできればと思います。

〔司会者〕

では、御自身で質問された方はおられますか。2番の方、いかがですか、質問してみたの感想は。

〔2番〕

質問してみたの感想は、特にはないんですが、ほかの人は質問しないんだなっていう感想でした。

〔司会者〕

特に質問することへの御抵抗とかはなかったですかね。

〔2番〕

全くないですね。

〔司会者〕

何かそれは、裁判官から説明があったりとか、そういうことなんですかね。

〔2番〕

そうですね、野澤裁判長から事前に、どんどんどんどん聞いてくださいというのがあったので、どんどん言ったれと思いました。

〔司会者〕

分かりました。

6番の方、いかがですか。

〔6番〕

私も直接質問させていただきました。評議の時に疑問に思ったことを話し合っている時に質問してもいいですよって言っていただいたので、直接質問してみようと思って質問させていただいたんですが、もう少し聞いてもよかったかなと思います。あまり長くは聞けなかったです。でも、その人柄っていうか、どうしてそこまで、その経緯に至ったことを知りたかったので質問させていただきました。

〔司会者〕

実際、質問されてよかったですかね。理解できましたかね。

〔6番〕

分かりました。その答えがしっかり返ってきましたので、はい、それは分かりました。

〔司会者〕

質問されなかった方、どうですかね。質問しづらかったとか、何かあるんですかね。いかがですか、なかなか難しいですかね。どうですか、5番の方。

〔5番〕

正直私は質問はしなく、裁判官の方から話をしていただいたような状況だったんですけど、やっぱりあの場面で、正直、得意な人もいれば不得意な人もいるような状況なので、私はどっちかというとな不得意なような状況で、聞いて質問をしたかったんですけど、その中で裁判官の方が、じゃあ聞けないなら聞いてみますよっていう一言がかなり救われたなっていう印象になります。なので、本当にああいう時、評議室の中で、じゃあ私質問しますっていうことで助け船を出していただいたので本当にありがとうございますっていうような状況でした。

〔司会者〕

ありがとうございます。

直接質問される方もおられますし、裁判官の方からその方の質問を引き継いで質問する場合も多いかなと思いますけれどもね。

では、審理の関係は以上にしまして、評議の関係を聞かせていただきますけど、皆様、評議の雰囲気はいかがでしたでしょうか。評議では、思ったこと、あるいは自分の意見を率直に言うことができたかどうか、また、皆さんがそういう意見を述べられるように、裁判官の方で何か配慮がされていたかどうか、こういったことなどを聞かせていただけたらと思いますけれども、評議に参加しての率直な感想はいかがでしょうか。1番の方、どうぞ。お願いします。

〔1番〕

感想ですが、やはりそういう重い事件こそですね、時間がないと最後バタバタになってしまうのかなと思っていたんですけど、裁判長なり裁判官の皆様方がスムーズに

流れを組んでくださいましたので、比較的発言もしやすかったですし、そのなかで結論出せたなというふうには思って、感想としては思っております。

ただやはり、それをどうだろうって苦悩している方も、表情では捉えた方もやっぱりいらっしゃいましたし、ほとんど発言しない方もいらっしゃいましたし、その方は大分悩んでらっしゃったとかですね、そんな感じが見受けられたんですが、私はよく発言させていただきました。そういうことで、通常の仕事でいう会議みたいな感じではなく、みんなが自由に意見を出し合えたですし、非常にそれが反映されたものだったなというふうに思っております。

〔司会者〕

チームとしてまとまったというような感じはしましたかね。

〔1番〕

そうですね。最後は皆さん、納得していただいたということで、はい。

〔司会者〕

分かりました。ありがとうございます。

2番の方、いかがですか。

〔2番〕

雰囲気は非常によかったですね。野澤裁判長を初め裁判所職員の方々のおもてなしのおかげで、非常にいい6日間でした。

〔司会者〕

率直に、皆さん疑問に感じたこととか思っていることを率直に言ってくださいというような説明が最初にありましたか。

〔2番〕

もちろんありました。しゃべりにくい方にもどんどん、しゃべりにくい方はどんどん裁判長がコメントを求めておられて、その辺はちゃんとかう、意見の偏りが、言う人と言わない人でばらつきないように配慮されている感じが非常にありました。

〔司会者〕

ありがとうございます。

3番の方、いかがですか。

[3番]

非常に話しやすい雰囲気を作っていただいて、お一人お一人に、一つの事件について感じ方が人それぞれ違うなっていうことを改めて思いました。

[司会者]

ありがとうございます。

4番の方、いかがですか。

[4番]

全員とまではいかななくても、皆さん、積極的に意見を出して、野澤裁判長のリードが非常に上手で、みんなそれぞれ意見を出すことができたと思います。

[司会者]

ありがとうございます。

5番の方、いかがですか。

[5番]

全体的に通してとてもよかったなと思います。本当にしゃべれない自分とかも、野澤裁判長とかもどうですかっていうことでコメントを求めてきて、本当に話しやすい、言葉に詰まってしまったとしても、自分がこういうことだなっていうことを裁判官、裁判長含めて、ああこういうことなんですよって、あっそうそう、そういうことなんですよっていうことは本当にプロなんだなということをととても痛感したような状況になります。本当にみんな最終的には、笑顔っていうわけではないんですけど、本当に一致団結できたなというところがとても印象的になります。

[司会者]

6番の方、お願いします。

[6番]

最初はとても緊張して、自分の意見も言えないんじゃないかなと思っていたんで

すけれども、一人ずつの意見を、こうやってしっかり聞いていただいて、自分の意見が言えるように進めていただいて、自分の意見をしっかり言えたと思います。それで、みんなの雰囲気もとてもよかったですし、休憩時間するときにも、評議中じゃないときでも、あれはこうだよねとか、さらっと言える、楽しいというか、雰囲気に、和やかな雰囲気になれたので、自分の意見がどんどん言いやすい雰囲気になりました。

ちょっと分からないなっていう質問もあったんですけども、その一人ずつの皆さんの意見を聞いて、あっ自分もこうだと思うっていうことが、一人ずつ意見がちゃんとあって言えたのでよかったですと思います。

〔司会者〕

ありがとうございます。

意見を、言うか言わないかは個人差もありますので、割と皆さん言いやすい環境ではあったということですかね。また、最終的にはチームとして一体感をもって話し合いをして結論を出したと、こんなような印象でしょうかね。

裁判とか法律の知識とかがない皆様が参加するということで、そうはいっても、評議では割とものが言える、発言ができるような、そういうその評議がされたということなんででしょうか。つまり、専門的な知識とか法律知識とかですね、そういうものが仮になかったとしても、十分評議に参加できるというような、そんな受けとめ方なんででしょうか、いかがですか。

(参加者うなずく。)

評議の関係では、齋藤弁護士からは、座り順の関係で、質問がありますので、どうぞ。

〔齋藤弁護士〕

これ裁判所に聞いたほうがいい話なのかもしれないんですけど、評議のときに裁判官が3人並んで座って、裁判員の方が周りを取り囲むような形なのか、あるいは分かれてですね、裁判官もばらばらになって評議に参加していたのかという、その

辺をちょっとどなたでも結構ですけれども教えていただければと思います。

〔司会者〕

皆様はどんな感じですかね。

〔野澤裁判官〕

裁判長と右陪席，左陪席，ある程度散って，その間に裁判員の方を何人か挟むような形でやってみました。

〔司会者〕

そうですね。裁判官3人固まらないで，裁判員の方々の中にですね適宜入って，皆さんと一緒に話し合いをするということをやっているかなとは思いますがね，これはその場所によって違うかもしれませんけれども，長野ではそういうやり方をしているというところだと思います。

よろしいですかね。

〔齋藤弁護士〕

はい，結構です。

〔司会者〕

では，続きまして，裁判に参加することに当たっての負担の関係について皆様に御感想や御意見を伺えたらと思いますけれども，まず，皆様が裁判員に選任された後，裁判が実際に始まるまでの間に，お仕事の関係であるとか，御家族の関係などで調整に苦労したということはございましたでしょうか。会社の関係とかも含めていかがでしょうか，どうですか。先ほどのお話ですと，皆さん割と会社の方，職場の方もですね理解があって協力をしていただいた，むしろやってこいと後押しをしてくれるようなところもあったってというようなことも伺いましたけれども，特に苦労されたようなことはございませんでしたか。

逆に裁判員候補者になった時に仕事の関係で調整が必要だったとかということはございましたか。6番の方，いかがですか。

〔6番〕

裁判員で、もう来てくださいじゃなくて、その前に裁判員候補ですっていう時に、裁判員じゃないのに、もしなったときにお休みをどうしようかっていうのはとっても悩んで、それで職場に相談したんですけども、私、仕事で代替えさんという人を入れていただくんですけども、休んだときに。その代替えさんの手配に、もし裁判員に選ばれなかったら、じゃあ代替えさんは要らない、裁判員になったときには代替えさんは要るっていう、その代替えさんもお願ひしなきゃいけないし、その候補のときに、こんなにたくさんいるのに6名に選ばれるのはないだろうなと思ってたんですけど、その多さにびっくりして、皆さん御都合どうされているんだろうって思いました、その時に。

〔司会者〕

分かりました。結局、裁判員に選任されたので代替えの方が来ていただいたと、そういうことですかね。

〔6番〕

その前に、どうやってお休みをいただけるかなと。

〔司会者〕

そこが苦勞されたということでしょうかね。

〔6番〕

はい。

〔司会者〕

ほかの方、いかがですか。1番の方どうぞ。

〔1番〕

裁判員が決まるときは金曜日だったんですね。金曜日で、そこに行くことは全然調整できたんですけども、で、土日挟んで月曜日からもうすぐ来てくださいということで、金曜日の午後、会社へ戻って、それから月曜日から4日ほど留守にするので、そののやっぱり調整が難しかった。その間が、これは決められたことなんですよけども、会社の仕事の調整をすればですね、やはり金曜日に決められて月

曜日だと結構厳しいので、そこのところは一日ぐらい空けていただくとか、何かそういう工夫をしていただければ、もっと仕事の、会社の間とか仕事場の方々も御理解いただけるのかなと。その前にももちろんなった場合は来ないよということでももちろん話はしておいたんですが、ちょっとそこがあまりにも急すぎて、なかなか忙しい時期だと絶対に無理だなんて、たまたま私は2年前の今ぐらいだったんで、雪が結構降ったりとかいう時期だったんですけども、比較的仕事もなかったので参加できたんですが、そういうことも考慮していただけると有り難いなと思いました。

〔司会者〕

ありがとうございます。今その審理が始まる日の前に裁判員の選任ですね、裁判員、補充裁判員の選任をすることも多いかなと思うんですけど、その選任期日と審理の初日の間隔ですね、間どれぐらい空けたらいいとか、このあたりで御意見とかございますか。先ほどのお話ですと、もしできれば空けてもらったほうが調整しやすいということなのか、そのあたり何か御意見ございますか。3番の方、いかがですか。

〔3番〕

私はシフトで働いているので、最低でも1か月半は空いてないと、もう仕事が入ってしまうので、最低でも1か月半とか2か月ぐらい前に予定が分かっていたら有り難いと思います。

〔司会者〕

ほかの方、いかがですか。どうぞ、2番の方。

〔2番〕

私は何とかやりくりできなくはないので、インフルエンザになれば急に5日間休んだりするじゃないですけど、まあ何とか、なったらなったらでやろうと思ってましたので、そこは。

〔司会者〕

よろしいですかね。

それとですね、もう一つは、先ほど評議の関係でお聞きしましたけれども、評議の内容については守秘義務が課されておりますけれども、それについてどこまで話すことが許されているのかということについて判断に迷うことがあるかということはいかがでしょうか。あるいはその守秘義務は負担に感じられているかはいかがでしょうか。では2番の方、どうぞ。

〔2番〕

特に全く負担には感じてません。評議の場の中でのことは守秘義務があって、法廷は飽くまで公開なので、それについては特に問題ないというふうに裁判長から教えていただいていますので、非常にそこははっきりしているので、特段何も、はい。

〔司会者〕

ありがとうございます。

先ほど4番の方は、なかなかちょっと悩ましいこともあるというふうにおっしゃっていましたが、いかがですか。

〔4番〕

そうですね、できれば、より大勢の人に、この裁判員制度、非常にいいですよというところまでは全然問題ないんですけども、話をしていく中で自分はこういう裁判で、それで、やっぱりどういうところが論点になったのかというところまでね言いそうになっちゃうんですよね。その辺のところがちょっと悩ましいなという感じで、守秘義務でどこまでっていう線を引かれているところは十分承知していますけれども。

〔司会者〕

分かりました。それで御判断に迷って精神的に苦しいとか、そういうことはありますか。

〔4番〕

苦しいことはないですけれども。

〔司会者〕

ただまあ悩ましいところと。

〔4番〕

そうですね。

〔司会者〕

できるだけそのいいところを伝えたいと思うんだけど、逆にどこまで伝えたいのかというところが悩ましいところもあるっていうところですかね。

〔4番〕

はい。

〔司会者〕

ありがとうございます。

法廷で見聞きされたことについてはお話いただいても構わないということにはなっているんですけども、ほかの方、いかがですか、守秘義務の負担、そういうところではどうでしょう。6番の方、いかがですか。

〔6番〕

いや、特に守秘義務で精神的に追い込まれたとか、負担に思ったことはないです。説明していただいたので、評議のことは守秘義務があります。そのほかのことは大丈夫ですっていう説明していただいたので、それは頭を切り替えようって、家に帰ったら忘れよう忘れようってしました。

〔司会者〕

ありがとうございます。裁判員裁判が終わった後に、御自身の経験を家族とか知人とかにお話とかはされてますか。

(参加者うなずく。)

経験されたことは話はされているというところですかね。分かりました。

この関係では、弁護士の方から、経験者同士で話をしたいと思うことがあるかという、そういう質問が出ておりますけれども、皆様いかがですか。ほかの裁判員経験者の方々と話をしたいと、この経験を共有したいというような、そういう思いを

持たれたことはあるかというところはいかがでしょうか。1 番の方、いかがですか。

〔1 番〕

同じ時に一緒にいた方々とは、その後何ももちろん話すこともないんですけども、やはり終わった後に、本当あれでよかったのかなとかですねと思うときがあったりするんじゃないかなとかですね、あのときどういうふうに思ってたのかとか、その辺りの話をですね、その後、被告人はどうなったのかとかですね、そういうこともやはり、やはり気になるんですよね。そういうところをほかの人に話せないところ、その守秘義務の関係で話せないじゃないですか。だからやっぱり、そのやった人たちと話をして、何となくその気持ちが少し晴れるかなというところもあったりするもので、そういう場があると、実際そのときに一緒だった人ともう一度話してみたいなっという気持ちはあります。

〔司会者〕

ありがとうございます。

ほかの方、いかがですか。5 番の方、いかがですか。

〔5 番〕

裁判員って、同じ事件ってことですか。

〔司会者〕

同じ事件じゃなくてもいいです。裁判員を経験された方っていうことです。

〔5 番〕

個人的な意見では、その裁判員同士で話すっていうことは、正直したくはないですね。これはこれなので。やっぱり自分の経験に対して、いろんな方に話すことはいいと思うんですけど、その裁判員がじゃあどう思ったっていうことに関しては、その事件だけ、その事件というかそのことだけをすごい考えていたような状況で、変な言い方で言ってしまうと、開放されたような状況になりますので、話したいとは思いません。

〔司会者〕

よろしいですか、どうぞ。

〔齋藤弁護士〕

ちょっと補足で、もちろん今、1番の方からお話があったように、同じ裁判を経験した方とお話したいというのも一つだと思いますし、それとは別に、やはり裁判員を経験した方特有のですね悩みとかそういうものがあるって少しお話をしたいんだけど、なかなか経験した方じゃないと分からないっていうところもあるんだと思うんですね。ですから、被告人がその後どうなったのかっていうところでいけば、多分刑務所の中がどうなっていて、どういう刑務所で過ごしているのかというところも含めて、いろいろとそういう場を提供しようっていうような活動が結構全国ではそういったいろんな民間ですとか団体が立ち上がっているんですけど、残念ながらちょっと長野にはそういうものがないものですので、ですから裁判員の方のそういう御希望を今日お話聞いてですね、またもしそういう御希望が多ければ、そういったことも一つ考えていかなきゃならないのかなというところで質問させていただいたところです。ただ、なかなかちょっと裁判員の方がどこにいらっしやるかって全然分からないし、お互い連絡取りたいと思っても、多分取れないという状況なので難しいと思いますけどね、ただ、そういう意味でちょっと質問させていただいたということです。

〔司会者〕

ありがとうございます。

ここまでのところで、ほかに質問したい点がありますでしょうか。検察官はいかがですか。

〔加藤検察官〕

ございません。

〔司会者〕

齋藤弁護士、いかがですか。追加で質問。

〔齋藤弁護士〕

結構です。

〔司会者〕

では、ここまでのところで、裁判官、検察官、それから弁護士の立場で、ここまでのところの感想などお聞かせいただけたらと思いますが、いかがですか。

〔野澤裁判官〕

本日は本当にありがとうございました。

基本的に率直にお話いただきましたよね。あまり私に遠慮されてしゃべれなかったらとも思いましたが、お聞きしている限りだと結構率直に御意見伺えたようで、本当に私も改めて事件とか振り返って参考になりましたので、本当に今日はありがとうございました。

〔加藤検察官〕

本日はどうもありがとうございました。

裁判員裁判が終わった後に裁判員の方が、どんな感想を持たれたのかということは、なかなか知る機会がないところだったので、本日、率直な御意見をいただけて大変参考になりました。

分かりやすい書面、それから証拠説明など、今後の活動に活かしていきたいと思います。ありがとうございました。

〔齋藤弁護士〕

本日はありがとうございました。

非常に貴重な経験を私の方もですね今日させていただいたというふうに思います。

これは個人的にお願いしたいことなんですけど、やはり裁判員経験する前に、皆さん、裁判ってどんなところか分かんないし、できたら行きたくないなっていうふうに思っておられた方が多いんじゃないかなと思うんですけど、経験されてみると、今日お話あったようにですね非常にいい経験だったっていうことを理解していただいているのかなというふうに思っていますので、その経験を是非多くの方にお話をさせていただきたいなというふうに思っています。それをまた聞いてですね、裁判員つ

て別に怖いところじゃないよと、裁判所って怖いところじゃないよってというような感じをですね、多くの人に是非持っていただきたいなと思いますので、皆さんの方でも是非そういったこととお話、随所でしていただけると有り難いかなというふうに思います。

〔司会者〕

ありがとうございます。

それでは、時間もまいりましたので、最後に皆様にお一人ずつ、裁判員を経験した前と後で、刑事裁判に対する見方が変わったか、どういう変化があったのかということよろしければお話いただきながら、これから裁判員になられる方、特に不安をお持ちの方々に対して何かメッセージがあればお話いただけたらと思います。では、1番の方からよろしいでしょうか。

〔1番〕

刑事裁判については、その量刑の出し方というんですかね、そちらの方が今までちょっと分からなかったもので、それについて非常に勉強になったので、より今度はそういう報道を見てもですね、あっ、こういう事件はこうなんだなって自分なりにちょっと考えたりすることも多くなりました。こういう場合はこうなんだとかですね、そういうことがやはり少し、先ほど言ったように身近になってきたなというふうに思っています。

自分は勝手に思ってるんですけども、その量刑という部分でいくと、殺人事件で、犯罪を犯した人に対する量刑としては、本当にそれが感情からするとそれはどうなのかっていう気持ちがやっぱりずっとあってですね、それがやはり加害者が有利になってるのかっていう部分も、適当ではないんですが、発言は適当ではありませんけど、そういう量刑になってて、被害者もかわいそうだなっていうのがやっぱりあって、私たちはその被害者の立場になって、その立場に立てるのは私たち裁判員なのかなと。ですから、そういう被害者の立場に立った上で、やはり少しでもその方たちに寄り添えるようにですね、その資格が与えられたのであれば、しっかりと参加

してですね、審理したり評議した中で、しっかりその代表としてですね役割を全うしていただければ、もっと恐らく充実したものが得られるんじゃないかなというふうに思いますので、是非迷った方がいたらですね、そういうことで背中を押してやっていただければなというふうに感じております。

〔2番〕

裁判員ですのでね、陪審員とは違いますので、恐らく多くの市民はその辺自体を混同している人が多いんじゃないのかなと、多分分からないがゆえに不安がっている部分がかかなり多いんじゃないかなと。今の日本の裁判員システム、刑事、司法、かなりよくできてるんだと、6人の裁判員プラス3人の職業裁判官がいて、必ず過半数で、かつ1票は職業裁判官の札が入らなければいけないということで、別に1人の裁判員の考えで、かなり極端にね偏ったとしても、それがすぐ反映されるわけではないですし、続いて、今度はプロだけの二審などもありますのでね、飽くまで一審の場においてあなたの価値観、考えを、逆に法律の素人の考えを述べるのを求められているシステムなんだよということをですね自分が経験しましたので、そこは逆にプロじゃない素人の意見を国が求めているわけなので、是非選ばれたんだからやってみたらというふうに経験者としてはお勧めしたいなと思っている次第です。

〔3番〕

改めまして、何の被告人にも、被害者にもなりたくないと思いました。もう自分の中で最低限のルールとマナーを守って生きるのも、この裁判員になった責任みたいなものかなと思いました。

あとは、裁判員にこれからなられる方には、人生経験の一部として是非お引き受けするとよいと思ひまして、会社でもちょっとずつ言ってます。

〔4番〕

まず、裁判員候補になったならば、裁判員になることを前提に周囲の職場なり家庭なり、努力していただきたいなというふうに思います。ただ、私自身は職場で男

1人、女1人というときにはですね、ちょっとつらいなということは思いましたけれども、何らかの形で参加する、裁判員になるということは、非常にその人のためにもなるし、周りにも影響を及ぼすことができるというふうに思います。

いろいろなことを私自身も今回やった中で、身に詰まされるようなところもありましたし、一つは、その人が真実をありのままに述べて最後まで貫くということが必要なんじゃないかなということをつくづく思いました。

〔5番〕

この裁判員制度で選ばれて、今回こういう形で最初から最後までやりきったんですけど、正直な率直な感想としては、もっと若い世代、中堅、あと高齢の方たちも参加しやすい環境で、本当に裁判員裁判で選ばれたということ胸張っていいように、私も周りの方にも勧めたいなとは思っております。正直言って、先ほど2番さんも言ったとおりに、素人の意見としてみんなで一致団結して最終的に結果となつてということは、平凡な日常を過ごしている私からしてみれば、かなり刺激的で、やっぱりニュースとか裁判員制度で決めましたとかということになると、おっ、どうということになったんだ、こういう結果ってこういうふうに審議したんだなっていう、やっぱり興味は持ち出しているような状況でして、その後やっぱりニュースとか見続けたり、こういう事件ってやっぱりこういうふうにやるのかな、裁判員裁判で選ばれて最長何日間、この間見たのは二百何日間選ばれたものとかも、おっ、すごいな、こういう人たちってっていうふうに、でも実際自分が経験者として見れば、でも本当にこういうことを自分でやったんだなっていうことを胸張って本当に言えるなっていうことを、かなりやっぱり思ったような状況になります。本当にこれからの人たちにメッセージとしては、裁判所怖くないよっていうところだけは言いたいような状況にあります。

〔6番〕

私も普通に生活してて、仕事と家庭の中でしか生活してないので、こんな犯罪が世の中にはたくさんあるんだなということを経験させていただいて分かりました。

本当、怖いことだなって思いました。

参加させていただいた私の場合は、すごい凶悪な事件ではなかったので、すごい頭が切り替えられて普通に生活に戻れたんですけれども、これでもっと凶悪な犯罪だった場合は頭は切り替わったのかちょっと分からないですけども、とてもいい経験にはなりました。ニュースとか新聞も、今までさらっと見てたのが、どれどれってすごく真剣に見るようになって、すごく気になるようになって興味も出てきました。

これからもし選任された場合の方たちは、私も知識も何もなかったんですけれども、分かりやすく説明していただいて務めさせていただいて、できるということで、いい経験になるのでやってもいいんじゃないかなと思います。お仕事とかの都合がつく限りなんですけれども、やってもいいんじゃないかなと思います。

あと、子どもがちょうど中学校、高校生、大学生とかいるんですけど、子どもたちの方がとっても興味が出て、私が話した、大人よりもかえって子どもの方が目がきらきらきらして、どうだったの、どうだったのってすごく気になっているので、子どもたちにこういうふうだよって、子どもたちにもっと説明して広げてお話ができる場があったらいいんじゃないかなって思います。

〔司会者〕

どうもありがとうございます。

皆様ありがとうございました。本当に率直なお話を今日はいただきまして、本当に感謝しています。

裁判員制度10年をもうすぐ迎えます。私ども法曹三者は、裁判員裁判に、制度に携わるような私どもも、日々よりよい制度になるように、また、皆様が参加しやすい環境づくりができるように努力しているところではありますけれども、今日皆様からいろんな御意見や感想をいただきまして、勇気づけられるところも多々ありました。励まされるところも多々ありました。今日皆様からいろいろな御提案もいただきましたので、今後の制度の改善、運用に参考にさせていただけたらというふ

うに思っております。本当にどうも今日はありがとうございました。

それでは、これで裁判员経験者との意見交換会を終了させていただきます。

それでは、引き続き、報道記者との質疑応答に入らせていただきます。

では、幹事社の方、どうぞ。

〔NHK記者〕

皆さん、お疲れのところありがとうございます。それでは、代表して質問させていただきます。

まず1問目として、辞退する方、辞退率というのが、今、裁判员を辞退する方というのが多いということになってますけれども、辞退する中でですね引き受けようとした理由はこういったことがあるのでしょうか。意見交換の中でも興味があるとかいろいろおっしゃった方もいましたけれども、ちょっと簡潔にもう一度そこを教えてくださいませんか。

〔司会者〕

では1番の方からどうぞ。

〔1番〕

私は一度辞退をしております。2回目だったんですね。それで、やはり1度目は仕事の関係があったのでやむを得ずだったのですが、できればこれに参加したいということはあったのですが、興味を持っていましたし、国民としての義務だって言われますと、それはやんなきゃいけないんだなっていう覚悟で2回目で引受けさせていただいたということでございます。

〔2番〕

モットーがイエスマンなんですね。誘われたら全てイエスです。あとは批評家ではなくプレイヤーになりたいなとふだんから思っていますので、以上です。

〔3番〕

質問状が来た時に、あっもうこれは出るしかないなと思ひまして参加させていただきました。

〔4番〕

時間的にも家庭的にも全然問題ありませんでしたので、積極的に参加させていただきました。

〔5番〕

小学校の子どもから国民の義務だって言われたので。

〔6番〕

ちょうど子育ても終わって、介護もなく、自分の病気もなく、うまいときに来たなっていうか、で、職場は理解があって、自分に来たのだから、せっかく来たのだから、いい経験になるかなって、お役に立てたらと思いました。

〔NHK記者〕

ありがとうございます。

それではですね、今よりもですね、どのような仕組みが今後整っていけば、今後皆様のように、その裁判員を引き受ける人が増えていくと思いますでしょうか。

〔司会者〕

もう少しこういう仕組みにしたら、あるいはこういう工夫をしたら、辞退しないで引き受ける人が増えるんじゃないかっていうことはございますか。では、1番の方、どうぞ。

〔1番〕

この事件の質がですね、殺人だったり、ちょっとそういう重い感じのものに特定されているんですが、もうちょっとハードルを下げてくださいたりですね、いただくと、もうちょっと参加しやすく、理解をしてくれるのかなとかっていうのはちょっと思ったりしました。その精神的な苦痛だとか、そういうことを考えると。

〔司会者〕

ほかにいかがですか。

今のその殺人とか、あと御遺体とか血痕とか、こういった写真を見なくちゃいけないんじゃないかという、そういう不安をお持ちの方が多んじゃないかと思うん

ですけれども、本当に特に必要がない限りはそういった写真ではなくてイラストにしたりとか、例えばその血痕についても赤以外の色を使ったりとか、そういう工夫も今しているところで、できるだけそういう不安を持たずに参加していただけるように、一応こちらの方でも証拠の工夫とかに取り組んでいるところではあるんですね。2番の方、どうぞ。

〔2番〕

ちょうど昨日、NHKさんのクローズアップ現代やってみましたけど、NHKさんとはいいませんが、マスコミ全般見てて、報道各社、裁判員について多少ネガティブな報道が目につくかなと。裁判員経験者のアンケートですが、96%ぐらいでしたっけ、非常に好意的で、やってよかった、この6名も非常に好意的に捉えている、その辺の経験者の声をもっと広く伝えていただいて、非経験者、あるいはそういうイメージだけで、遺体の写真を見てですとか、どうのこうのとかな、これだけ、九州の方かなんかでもすごい拘束日数、ちょっと関西の方が忘れちゃったけどね、あったりとか、何かそういう何百件、何千件のうちの1件とか、何かそういうネガティブなのばかりが強調されがちで、もっと本来のやってよかったっていう意見の報道が非常に少ない気がしております。

あとは報道されるとしても、10周年ですけど、裁判員裁判が始まる直前もNHKさんで結構特集とかね大々的にやってたのを私見てたの記憶あるんですけど、あとは、やっぱり報道されても新聞の社会面とかで、今、若い人でそもそも新聞読んでない方も多い、あとはNHKさん嫌いなわけじゃないですけど、NHKさんばかりじゃなく、もうちょっと民放の方でももっと軽く取り上げるとかしていただく、あとはさっき5番の方が小学生のって話ありましたけど、今、選挙権も18歳からになって、高校生とかにどんどん喚起しているように、一朝一夕にはいきませんが、もっと若年層から、小学生ぐらいからですね、そもそもこれ国民の義務なんですってことで、もう三大義務じゃなくて四大義務にさせていただければいいんじゃないかなと、標語、フレーズとしてですね、以上です。

〔司会者〕

今、お話の中で出た裁判員経験者の声をもっと伝えるというところが私どももそのとおりだと思っております、この意見交換会もその一つではあるんですけども、それ以外にも皆様の声を、もっともっと伝えていく、そういう取組をしてまいりたいというふうに思っているところです。

〔NHK記者〕

次ですが、これも全員じゃなくて、該当する方だけでお願いしたいんですが、裁判は専門的な知識が必要とされるというふうに言われてきましたけれども、困った点とか、あるいは苦労した点があったのでしょうか。あった場合は、具体的にこのようなことがあったかというので、これも該当される方がいらっしゃればでお願いしたいと思います。

〔司会者〕

こんな点はちょっと困ったなとか、この点苦労したってということございますかね。どうですか。5番の方、どうぞ。

〔5番〕

正直困ったことはないですね。困ったことがあったとしても、裁判長初め裁判官の方でしっかりとその辺は話をしてくれるので、正直ここに来るまでが困ったぐらいであって、もう本当にやっぱり裁判員で選ばれたときに、こういうことをやるんだって特に何も書かれているわけではないので、実際ここに来て評議室に入ったときにいろいろな説明をされて、私は5日間だったんですけど、あっ、やっぱりあっという間だったような印象的になりますね。なので、困ったことは正直言ってあまりないですね。

〔2番〕

一つありますね。証人尋問、被告人質問なんですけど、ここについては事前の特に資料ありませんので、自分で常にメモを全て取り続けなければいけなくて、6人の方、ほかの方どのぐらい取ってるのかなと思ったら、正直余り取られてない方も

いらっしゃって、記憶どんどん薄れちゃうので、証人尋問、被告人質問については、本当はその場で何かもう文字で起こすようなものがないと、例えばちょっと御年配の方とかだと、ちょっとついていけないんじゃないかなと、そこできっちりメモ取ってる方と取られてない方の、やっぱり情報格差ができてしまってるなという印象がありました。

〔司会者〕

2番の方の参加された事件では、検察官とか弁護人が、裁判員がメモ取れるような、そういう何かメモ用紙みたいなものを配布されたりしていましたか。

〔2番〕

メモというか、紙、余白とかはいろいろあったので書き込めるんですが、やはりその、検察、弁護側双方はゆっくりしゃべっていただいていますけど、証人とか被告人はね、裁判員のことは全く考えていませんので、そこで何か、現在のITの技術を使って、すぐ文章として起こせるものがあつたほうがいいんじゃないかなと思いました。

〔4番〕

今に関連して、裁判で述べられたことを、あれは文字に変換して映せるようにはなっていましたけれども、そこに誤変換が多いので、それで気になってしまうということもありましたので、何か古いものだというふうに聞きましたけれども、それを最新のものにしていただければいいのではないかなと、その点については思いました。

〔NHK記者〕

皆さん経験で、判決まで携わってこられたと思うんですが、人に刑罰を下すというのは非常に重いことだと思います。その後ですね、どのような心境で過ごされてきましたでしょうか。例えば被告人のことを思い出すことがあるとかですね、そういったこともしあれば、これもある方で構いませんので、何か発言できる方がいらっしゃればお願いしたいと思います。

〔司会者〕

先ほど1番の方が判決した後のことをおっしゃられていましたけど、1番の方、いかがですか。

〔1番〕

刑罰を実際、判決として出した後にですね、やはり終わった後に、それが適当だったのかということは考えたりはしましたけども、私もそれから先どうなったかっていうことはちょっと知りたいなとは思いますが。別にそれに責任持つわけじゃないんですけど、ちょっと気になっているので、そこは何を見たら分かるのかなと思いつついろいろ調べたんですけど分からなくてっていうのがありましたので、以上です。

〔司会者〕

判決した後、その後、被告人がどうなったのかということが気になっていると、そういうことですかね。

〔1番〕

そうです。その後また上告とかしたのかとか、その辺が分からなくてですね。

〔司会者〕

2番の方、いかがですか。

〔2番〕

今、記者さんが、人に刑罰をっておっしゃったんですけど、私は人に刑罰を下した感覚はなくて、その日の犯行事実、態様、証拠を自分なりに解釈してということで、飽くまでその客観的な事実に対して懲役はこうだというふうに思っていますので、特にそのプレッシャーとかも全く感じなかったというか、感じないように最初からそういうふうに捉えて臨みました。

裁判員の直後は、被告人どうなったのかなというふうには思っていたんですが、日常生活の中で忘れてしまっていて、今回の場で改めてまた被告人はどうされているのかなというふうに考えているぐらいです。

〔司会者〕

今おっしゃったのは、人を裁くというのではなくて、その人が、要するに被告人が行った行為に見合った責任の重さというのは、どのぐらいの重さなのかを考えるのが裁判員の仕事だと、そういうふうな理解ということなんですね。

〔2番〕

そうですね。人を裁くというと、そもそも倫理とか何かモラルとか哲学の話になってしまいますので、飽くまでもその事実に対してどう認定するのかっていう、淡々と粛々とそれをこなすだけという認識ですね。

〔司会者〕

ほかの方がいかがですかね、判決した後、終わった後、何かもやもや感とか不安全感を持ちながら生活しているなんていうことはありますか。4番の方、いかがですか。

〔4番〕

私の関わった裁判では、被告人が更生していく、明るいそういう将来が見越せましたので、そういう意味では被告人、その後、いい社会人になっていくんだろうなという気持ちでいます。で、結構思い出します。

〔NHK記者〕

今の関連で1番の方にちょっと追加で質問なんですけど、控訴したのかとかいろいろ調べたけれども分からなかったというお話で、よっぽど多分社会の耳目を集めたものでない限り、控訴審、上告審が報道になることってというのはあまりないとは思いますが、例えば裁判員限定で自分が関連した事件の被告人がどうなっていったのかとか、そういうことを問合せとかができたりするような、もし仮に仕組み等があった場合に、そういうのを利用してみたいなと考えますでしょうか。

〔1番〕

そういうところもですね、先ほどの4番さんの話じゃないですけど、そちらの方が更生していったとかですね、あの場でいろいろ、親御さんの年齢がどうだったとかいろいろな話が出たりして、かなり心配されていましたので、人ごとながらですね、

やはりそういうところもどうしても気になってしまっただけではおりました。ちゃんと更生してもらえればいいなというような考えがありましたので、別に知れるだけでいいんです。それを特別に何かやってもらいたいわけじゃなくて、どうなったのかだけ知れるだけで、少し気持ちが晴れるかなという感じです。それ以上はありません。

〔NHK記者〕

最後の質問になりますが、冒頭、室橋裁判官がおっしゃっていましたが、裁判員裁判の制度が始まって今年で10年を迎えますが、裁判員経験者として現行の制度で改善すべきだと思う点や裁判所側に求めること、それとあと、これ、我々報道に対してですね求めるようなこと、先ほど2番さんもちょっと触れてはいましたけれども、報道に対して求めることや何か御提言等あればお願いしたいと思えます。

〔司会者〕

こういうところ改善すべきだと思うところとか、どうですか、率直な御意見あれば、どうでしょうか。

〔NHK記者〕

せっかくですから、報道に何かあっていうことがもしあれば。

〔5番〕

報道関係もそうなんですけど、やっぱりネガティブな意見が結構多いような感じはしますね。私もこの裁判員に参加して本当によかったなっていうところは言いたいので、もっとそういう何ていうんですかね、悪かったところばかりではなくて、何がよかったのかも具体化して、やっぱり記事とかニュースとかにしてもらいたいなっていうような状況ですね。確かにクローズアップ現代で先ほどお話しされたように、世の中のニュースを見てると結構暗いニュースばかり取り上げられているんですけど、実際、裁判員に参加したことで、本当に記事の中で、やっぱり楽しかったっていうわけではないんですけど、本当にじゃあ、自分このことで、きっかけで、やっぱり考え方が変わったと思いますので、そういうところをもっと記事とかにしてい

ただければなと思っております。

〔司会者〕

ほかにいかがですか。裁判所側に求めることとかも、もし裁判所に、もしこういったこと、もうちょっとこうしてほしいということがあれば伺いますけど、どうですか。

〔5番〕

喫煙所をもう少し、もうちょっと喫煙所を、ちょっと何か違うところにしていただきたいっていう、私はたばこを吸うので。

〔NHK記者〕

代表質問としてはこれで終わらせていただきます。ありがとうございます。

〔司会者〕

どうもありがとうございます。

個別にいかがですか。

〔信濃毎日新聞記者〕

お疲れのところ失礼します。

この質問は、せっかくの機会なので、ちょっと発言、お答えも窮するかと思いますが、野澤裁判官に是非お伺いしたいと思っておりますが、私、松本支部の担当で裁判員裁判は、必ず記者会見を最後、裁判員の方に申請して、どういった進行だったのかというところをお伺いしてきましたけれども、毎回、野澤裁判官の本当に進行が皆さんスムーズだっていうふうにお話ございましたけれども、裁判官として特に市民の方々の、いわゆる裁判員と裁判官の協働として、この皆さんの知識、経験を、どのような形で聞いたかっていうところ、どのぐらい重視していたのかというところと、今回の制度で個人的に裁判官として皆さんのその知識、経験、どういったところに対して期待していらっしやったんでしょうか、是非お聞かせ願います。

〔野澤裁判官〕

基本的に、私は裁判員の方々に、あるいは補充裁判員の方々に求めている、説明

の時に申し上げているときもあるかもしれませんが、基本的にはもう別に、御自分の経験に基づいて、あるいは御自分の考えを率直に出していただくと。特に難しく考える必要はなくて、真摯にもう向き合っていただければそれで大丈夫ですっていうことで考えております。ですから、特にどういった経験がとかそういったことではなくてですね、もうそのいろんなところから参加されたいろんな層の、年齢層なり性別なりの方が構成に入って、率直に意見を言っていただくということだけで、もうこの制度の目的というのはある程度果たしていけるというふうに思っておりますので、特にこういった点がとかそういったことあまり意識してとか、引き出すとかということは考えてないです。ただ、少なくとも思っていることを言っていただけるようにと、そういうことについては意識して、なるべく発言しやすいように何か雰囲気作ればなとか、そういったことは考えておりますけれども、そんな感じですかね。

〔信濃毎日新聞記者〕

ありがとうございます。

加えてなんですけれども、特に2番と5番の方にもお伺いさせていただきたいんですが、例えば担当された事件によって言えば、暴力団特有の発想に基づいて、けじめをつけさせなければいけない、若しくは、いわゆる知的障害の度合いがどの程度のものであって、それがどの程度犯行態様に影響したのか、すなわち、証人などの証言も借りながら専門的なところが求められたり考えなければいけない点になった裁判もあったかと思えます。その中において御自身の経験、例えば暴力団となかなか付き合いがある人はそうそういないと思えますし、障害の方に対する理解というところも難しい点かと思えますが、その専門的な知識に対するところへの不安、本質とはまた別のところで不安にあったところ、または裁判官がどのように助けてくれたのかと御経験があれば是非お伺いさせていただきたいと思えます。お願いします。

〔5番〕

先ほど信濃毎日新聞さんの方で、けじめをつけろっていう言葉に対してですね、正直私は、あっこういうことを言ってるんだなっていうことが正直分かったような状況なんですけど、周りの裁判員の方たちは、はて何を言っているのかっていう形で話された方もいらっしゃるような状況でして、でもその時に裁判官、裁判長初め評議室とかに入ってですね、けじめをつけろっていうことはこういうことなんだよっていうことをしっかりと話をしていただいた中で、そこの文章をすり替えみたいな形で私たちの方で聞きやすい、標準語に直した言い方で当てはめていくような形をとっていたので、正直そのけじめをつけろっていう文章は、こういう形で強い言い方で言っているっていうような、変換をした形で話をしてくれたことによってすっと入ってきたような状況になります。

〔2番〕

障害者の事案で、障害について私自身は全く専門知識は持ち合わせておりません。ですので、つついいろいろな話を聞いている中で健常者の事案と錯誤しがちなのは、駄目だ駄目だ障害者なんだっていうふうに我に返りながら進めておりました。その辺は裁判官の方がうまく評議の場でリードをしていただきました。つい裁判員だけですと健常者前提の話のようになってしまいましたが、裁判官の方がうまくリードしてくれました。

やってて思いましたのが、そもそも障害の知識がないので障害の程度、実はそのIQ50というのを齋藤弁護士が、じゃあ精神年齢というのは年齢でどれぐらいなんだというふうなことを診断のお医者さんに繰り返し聞いておられましたけど、先生が答えられないと。だから先生がやっぱり答えられない中で、それぞれの裁判員もIQ50と言われても何とも分かりませんし、だからその中でじゃあそれをどう量刑に反映させるのかということも全く分からなく、量刑検索システムもIQ50だったら八掛けなんていうのがあるわけではないですし、そもそもIQ幾つ以下の方だったら少年法的な感じで、懲役刑ではなくて、もっと更生に重きを置くべきなんじゃないのかなと思うようなところもありましたし、そもそも被告人が懲役刑について

果たしてどこまで理解できて、それがどれだけ役立つのかも分からない中で、野澤裁判長からは心神耗弱には当たらないんでという話はありませんでしたが、ただやっぱり裁判員の方の多くから、多分、耗弱ってということは初めて聞いたと思いますし、耗弱には当たらないけどIQは低め。すべからくいろんな項目でこの方は低いから、いろんな行動に対してちょっとずつ認識が、認知機能が衰えているとか足りないのかなぐらいにしか捉えようがなかったのだから終わってみても分からないという認識。

〔司会者〕

専門家証人に聞かれたようではございますけれども、それでもなかなかその仕組みの理解が難しかったということなんですかね。

〔2番〕

そうですね、やっぱりそのIQって言われても、IQ50と言われても全然。

〔司会者〕

それ自体ではね。

〔2番〕

それ自体が全く分かりませんし、弁護人の方で精神年齢どれぐらいなのかって、その方が何となくは分かるんですが、ですから、そのIQを持ち出されても全く分からないですね。

〔司会者〕

それだけだと分からないってということ。

〔2番〕

そうですね。で、全部の項目に対して、やっぱりちょっとずつ劣っていると、劣っているからじゃあ七掛けなのか、八掛けなのかとかじゃないですけど、はい、そんな感覚でした。

〔司会者〕

だからIQの程度自体が問題になるわけじゃなくて、それが犯行にどう影響した

のかっていうその仕組みのところもう少し分かればよかったというところですかね。

〔2番〕

そうですね、もう少し障害がその犯行に及ぼす影響とか、その善悪の判断能力とか、もうちょっと何か数値化、一般人が分かるような数値化できるものがないと、これから認知の方も今増えておりますのでね、難しくて、ばらつきが出てきちゃうんじゃないかなってという恐れがあるかなと。

〔司会者〕

ありがとうございます。

〔信濃毎日新聞記者〕

ありがとうございました。

〔毎日新聞記者〕

先ほど5番の方から、自分が裁判員になってから考えが、考え方みたいなものが変わったっていうお話がありました。皆さんの中でも自分の具体的な考え方や行動が変わったっていうことがあれば、プラスな面でもいいですし、マイナスの面でもいいので、何か教えていただけますでしょうか。

〔5番〕

恥ずかしながら変わったっていうことは、日常生活にやっぱりその新聞、メディアとか、やっぱりこういう社会的な事案というかですね、正直今までは目を避けてきました。そういう、人が嫌がっていることとか、あまり興味がないという言い方はおかしいんですけど、じゃあそこに対して検察とか弁護士の方とかが求刑を決めて裁判長が判断を下すとか、別に自分に正直直接関係ないことは、変な言い方でしまうと目を背けていたような状況なんですけど、実際この裁判員をやったことによって、私、平凡な市民がここまで考えて、ここまで意見が出て、みんなでこういう形で決めていくということに対して、とても感動したような状況でして、ちょっと私も大学は出てなかったんですけど、正直、もう一度人生やり直せるんだったら

大学出て、法学部とか、やっぱりその検察とか弁護士とか、そういうところに行きたいなっていうふうには思うので、今からはできないので、子どもたちに対してそういう道も本当に、正義のヒーローではないんですけど、しっかりと自分がやったことに対して世の中に役に立ったなっていうふうに思いましたので、やっぱりそれを子どもたちに伝えていきたいなっていうふうに、そういうところの考えが正直大きく変わったなっていうふうに思いました。

〔毎日新聞記者〕

ありがとうございます。

〔司会者〕

裁判に参加して、なぜその犯罪が行われているのか、なぜこの犯罪が起きたのかっていう、その背景事情とかも知ることによって、先ほど、社会への関心が高まるっていう話がありましたけど、社会の有り様に対するその関心が高まって、私たちが住んでいるこの社会の有り様を、よりよいものに変えていこうという思いが生じる方も中にはやっぱりいるのかなと。それは私たちの社会をよりよくしていく、そういうきっかけにもなるのかなというふうにも思っているんですね。今日、裁判員の方々の発言の中にもそれをうかがわせるようなね話をしておられた方も多くいらっしゃったかなというふうには思います。

〔読売新聞記者〕

これもお答えいただける方で結構なんですけども、先ほど裁判の中で事実争っているところと、あと、いわゆる情状、日常のところとか、先ほど2番の方は事実についてというところだけを気にしていたっていうお話ありましたが、ほかの方でもその事実の部分と、いわゆる情状の部分を分けて判断をするときに心がけたことなどありましたら教えていただきたいと思います。

〔司会者〕

要は事実の部分と感情の部分ですかね。

〔読売新聞記者〕

そうですね。

〔司会者〕

いかがですか。さっき1番の方から被告人と被害者とそれぞれの思いというものの受けとめのことで、お話もあったと思いますけど、判断されるに当たって、あるいはその量刑を考えるに当たって、当然人間なので感情は当然あると思いますけど、それと裁判員としての判断をする上で、そこをどう折り合いをつけたのかとか、このあたりはいかがでしょう。

〔1番〕

私の事案というか事件が、家族間の中だったので非常に悩ましく、父親が母親を殺したということですので、子供のことを考えたり、自分も子どもがいたりしますので、そういうことを考えてしまうと、やはり感情的になるところは絶対にあると思うんですね。ただ、先ほど2番さんが言ったとおり、犯罪の罪、罪をやはり裁くので、そこはそこで考えを別にしてですね、そういう部分はある程度考えながらも、罪を裁くということに切り替えて徹してやっておりました。なかなか難しい考えでしたんですが、そういうふうに努めました。

〔4番〕

感情を100%排除することはできなかったと思います。被告人、それから証人の中で食い違ったときに、あるいは検察の方でこうでありますと提示されたものに対して、どこまで客観的に判断できるのかというところで事実関係について見きわめようという感覚がありましたので、100%排除はできないけれども、そのような意味で言えば合理的な判断はできたのではないかなというふうに思います。

〔司会者〕

ありがとうございます。いいですか。

〔読売新聞記者〕

ありがとうございます。

〔司会者〕

それでは、長時間になりましたけれども、本当にお疲れさまでした。どうもありがとうございました。

では、これで意見交換会を終わります。どうもありがとうございました。

以上